

第10回「困っている人を助けたい～思いやりの心～」

施設の廊下で車椅子を押しながらゆっくりと移動しているのは、さとみさん（仮名・35歳女性）です。さとみさんは脳性麻痺があり、車椅子での生活をしていますが、いつも明るく前向きな気持ちで施設での活動に参加していました。段差のある場所や重いドアの前では、職員や他の利用者さんの助けを必要とすることがありました。

そんなさとみさんの様子を、いつも静かに見ていたのが、かずやさん（仮名・24歳男性）でした。かずやさんは軽度の知的障害がありますが、とても観察力が鋭く、周りの人の様子をよく見ていました。ただ、自分から積極的に人に関わることは少なく、どちらかというと一人で過ごすことを好んでいました。

ある日の午後、さとみさんが作業室から談話室に移動しようとしていた時のことです。作業室の出入り口には小さな段差があり、車椅子では一人で越えることが困難でした。さとみさんが困っているのを見て、かずやさんは初めて自分から行動を起こしました。

「手伝う」。かずやさんが小さな声でそう言いながら、さとみさんの車椅子の後ろに回りました。さとみさんは驚いたような表情を見せましたが、「ありがとうございます」お願いします」と答えました。かずやさんは車椅子を慎重に押し、段差を無事に越えることができました。

「ありがとうございます」かずやさん。とても助かりました」とさとみさんがお礼を言うと、かずやさんは恥ずかしそうに「どういたしまして」と答えました。その時のかずやさんの表情には、これまで見たことのない満足感がありました。

担当の林職員は、この出来事を温かく見守っていました。「かずやさんが自分から誰かを助けようとしたのは初めてです。とても素晴らしいことです」と他の職員にも報告しました。

翌日、かずやさんは再びさとみさんが段差で困っているのを見つけました。今度は迷わず「手伝います」と声をかけ、車椅子を押してあげました。さとみさんは「かずやさん、いつもありがとうございます。頼りになります」と心から感謝の気持ちを伝えました。

それから、かずやさんの行動は日に日に積極的になっていきました。さとみさんが重いドアを開けようとしている時は、先回りしてドアを開けてあげたり、エレベーターのボタンを押してあげたりするようになりました。「さとみさん、大丈夫？」と声をかけることも増えました。

ある雨の日、さとみさんが傘を持ちながら車椅子で移動するのに苦労していました。かずやさんはそれを見て、「傘、持ちます」と申し出ました。自分も濡れる可能性があったにも関わらず、かずやさんはさとみさんの傘を持ちながら一緒に歩きました。

「かずやさんのおかげで濡れずに済みました。本当にありがとうございます」とさとみさんが感謝すると、かずやさんは「僕、濡れても大丈夫だから」と答えました。その優しさに、さとみさんだけでなく、その場にいた職員も心を打たれました。

かずやさんの思いやりは、さとみさんだけに向けられるものではありませんでした。他の

利用者さんが困っている場面でも、積極的に手を差し伸べるようになりました。パズルのピースを落とした人がいれば拾ってあげたり、荷物を運ぶのに苦労している人がいれば手伝ったりしました。

特に印象的だったのは、新しく施設を利用し始めた高齢の利用者さんに対する接し方でした。その方は認知症があり、時々道に迷ったような様子を見せることがありました。かずやさんは「大丈夫ですよ」と優しく声をかけ、その方の手を取って目的地まで案内していました。

職員の中には「かずやさんがこんなに人の世話をするようになるなんて」と驚く人もいましたが、林職員は「かずやさんにはもともと優しい心があったんです。きっかけがあれば、その優しさが行動として現れるんですね」と話していました。

ご家族にかずやさんの変化を報告すると、お母さんは涙を流して喜んでくれました。「家でも、近所のお年寄りの方を気にかけるようになったんです。『大丈夫?』って声をかけて、荷物を持ってあげたりしています。本当に優しい子に育ってくれて」と感激していました。

さとみさんご家族からも、感謝の手紙をいただきました。「かずやさんがいつも娘を気にかけてくださって、本当にありがとうございます。娘も『かずやさんがいるから安心』と言っています。こうした支え合いの関係が生まれることの素晴らしさを感じています」という内容でした。

かずやさんの行動は、施設全体にも良い影響を与えました。他の利用者さんたちも、お互いに助け合う場面が増え、施設内により温かい雰囲気が生まれました。「かずやさんみたいに、みんなで助け合おう」という声も聞かれるようになりました。

ある日、施設で地域交流イベントが開催された時のことです。地域から来た小学生たちが施設を見学していました。かずやさんは車椅子の来客者を案内したり、困っている人がいないか気を配ったりしていました。小学生の一人が「お兄さん、優しいね」と言うと、かずやさんは「みんなで助け合うんだよ」と答えました。

最近では、かずやさんは職員の手伝いもするようになりました。掃除の時間には率先して重い物を運んだり、新しい利用者さんが来た時には案内役を買って出たりしています。「人の役に立つて、嬉しい」とかずやさんは話しています。

かずやさんの物語は、誰もが心の奥に持っている優しさと思いやりの心について教えてくれます。障害があっても、人を思いやり、助け合う気持ちは誰にでもあること。そして、その気持ちを行動に移すことで、自分自身も成長し、周りの人々との絆が深まることを示してくれました。

今日も、かずやさんは周りの人を気にかけながら施設での時間を過ごしています。「困っている人はいないかな」と自然に周りを見渡すその姿は、思いやりの心が育んだ美しい習慣となっています。人を助けることの喜びを知ったかずやさんの優しい行動は、きっと多くの人の心に温かさを届け続けることでしょう。